

選抜試験と高校調査書

入学者選抜のための諸検査方法の一つとして高校調査書の参照がある。これが行われる主な理由は、受験者の大学入学後の学習成果を、高等学校在学中に得られた学習成績・学習態度等から推定して、大学教育を受けるに、よりふさわしい学生を選抜することにある。

このため、多くの大学において選抜試験に際して、学力試験の他に、高校調査書内容を適当に数値化するなどして活用している。また、推薦入学制度による選抜においては、これに大きく依存していることは言うまでもない。

このように、高校調査書の記載内容より得られる受験生個人に関する情報が、大学における教育の成果を十分に推定し得るめやすとなりうるならば、入学者選抜において、これが更に有効に利用されるべきであると考えられる。

一方、高校調査書記載内容は、現状では各高等学校単位で、在学生の成績等を相対的に評価したものであるため、その評価の普遍性について、多少の疑問を感じさせる面もある。

ほとんどの大学で、このような観点から、今後の選抜方法の改善の資料となすべく、選抜試験と高校調査書との関係についての調査を実施している。各大学等において行われている調査研究の状況について述べることとする。

(1) 高校調査書成績別の大学合格率

この関係の調査のうちで最も簡明な方法であ

る。高校成績として調査書成績概評別に合格率を求める方法がある（秋田大学、徳島大学、長崎大学等）。いずれの大学での調査結果でも、④の合格率が最高で、以下A、B、C、…の順になっている。さらにこの調査を高校卒業年次別（すなわち現役・浪人別）に分けて実施している大学も見受けられ、この結果も各大学で共通している。成績概評の代わりに調査書評定平均値ごとの合格率を求めている大学もあり（東京医科歯科大学、電気通信大学）、この場合も高校成績の良い受験者ほど合格率が高い傾向を示している。この評定平均値を変数として合格率に対する回帰直線を求めた例もある（電気通信大学）。このような調査結果は、高校成績と選抜試験成績との関連を端的に示していると言える。

(2) 共通1次試験、第2次試験及び両者の総合点と調査書評定平均値との相関調査

ほとんどの大学において調査している。さらに、これらの大学の大半で選抜試験成績、調査書評定平均値と大学入学後の成績との相関調査も併せ行っている。選抜試験成績と調査書成績間の相関係数は、各大学によって大幅にばらついているが、平均的にはほぼ0.3～0.4である。これが小論文の成績との相関となると更に小さくなることが示されている（新潟大学等）。その他、共通1次試験各教科と調査書の同一教科

評定値との相関を求めている例もあるが（お茶の水女子大学、東京農工大学、三重大学、島根大学、島根医科大学等）、これらの値もさして特筆するにはあたらない。

なお本節の主題ではないが、選抜試験成績と入学後の成績との相関が予想外に小さいことを指摘している大学が多い。これに反して調査書成績に着目する意見がかなりある。前者の相関が小さい理由は選抜効果によるものであり、不合格者も在学していたと仮定して相関係数を補正する試みが、科学研究費補助金によるプロジェクト・グループの中で提案された（大学入試センター）。この補正を行うと選抜試験成績と入学後の成績間に、十分に有意な相関のあることが分かる。

このような議論が大学内に多いことは、調査結果を蓄積し、有意な知見が得られた場合には、高校調査書を更に有効に利用しようとする意図の表れであると考えられる。

(3) 高等学校単位での調査

選抜試験成績と調査書成績との相関が小さい理由に、いわゆる高校間格差による影響を想定し、これに沿った調査を行っている例が数大学にある。すなわち、受験者が一定人数より多い高校を抽出し、各高校ごとに上述の相関などを求める調査である。

これから求めた相関係数は、受験者全体から求めた値に比してかなり高い数値を示すようである。また、このような高校別の相関係数の年度別変動も追跡し、同一高校でも年度により比較的変動のある高校のあることも明らかにされている。

この他にも同一高校からの受験生の評定平均値の平均と共通1次試験得点の平均点との比、すなわち、高校別1評定平均値当たりの共通1次試験得点率を算出している例もあり、この得点率が高等学校により大幅にばらつくことが指摘されている。

これらの知見は、決して高校間格差の助長には用いられるべきではないが、調査書の信憑性の向上、ひいては推薦入学制度採用の促進など入試改善に資するところが大きであろう。

(4) その他の調査

選抜に直接関係のある共通1次試験及び第2次試験の総得点を目的変数に、共通1次試験及び第2次試験の成績、並びに調査書評定平均をそれぞれ説明変数にとって重回帰分析を行っている（福岡教育大学）。この結果、共通1次試験又は第2次試験のうち配点比率の大きい方の成績により合否が決定されるが、高校成績は入試総得点の予測には無効であることが示されている。この場合も高校別に検討を行えば、多少結論の修正をせまられるかも知れない。

以上に述べてきたように、選抜試験と高校調査書との関係は、

- ① 調査書成績概評、評定平均値のいずれから、高校成績の良好な者ほど合格率が良い、
- ② 受験生全体で分析したとき、調査書成績と選抜試験成績との相関は必ずしも有意であると言えないこともあるが、大学入学後の成績との相関は、これよりも大きな値となる例が多い、

の2点が、ほとんどの大学における調査で指摘

選抜試験と高校調査書

されていて、この事実を高校教育と選抜試験の異質性と解釈し、選抜試験での高校調査書のウエイトを高めたい意向を持つ大学が、既にいくらか見受けられる。

しかし、大学における入学者選抜に関する諸

調査は緒についたばかりであり、今後の活発な調査活動により、社会に有意な大学生像、このような学生教育に望ましい受験生像などが明白になるとともに、選抜試験における高校調査書の有効利用が図られるであろう。